広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	故川内旦昭君を想う〈故 川内旦昭君の遺稿及び追悼〉
Author(s)	江端, 義夫
Citation	広大言語 , 6 : 73 - 75
Issue Date	1966-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046253
Right	
Relation	

故川内且昭君を想う

大学院国語学国文学専攻修士一年
江　端　義　夫

彼が他界してからすでに八ケ月過ぎた。その間に，はげしく引き裂かれた私の心の傷跡も，時間という名薬によって，しだいに癒され，今やっと正常な精神状態で客観的に彼について語ることができるようになった。

方言をこよなく愛し情熱を注いでいた彼が永眠した所は，彼の心のように青く澄んだ海の果しなく広がる太平洋上の島・与論島であった。それは，昭和四十一年二月十四日である。この翌日，広島大学方言研究会では，四年生三人（川内，横山，江端）が，卒業論文の要旨を発表することになっていた。当日，私は他の二人の出席しないのを寂しく思いつつ，発表した。しかし，その時には，もう，彼は広島にはいなかったし，この世にもいなかったのである。十八日になって初めて，私は彼の死を知った。その日の早朝，私は彼の夢を見た。それは海岸で黙然と座りこんでいる痩せおとろえた彼の姿であった。呼びかけると，彼は私の顔をじっとしばらく見すえて，そのまま表情一つ変えずに憂いを満身に浮かべ，走り去って行ってしまった。この夢での会うせと悲報との偶然の合致をいかに理解したらいいものか，私はその日から苦しい毎日がつづいた。

かつて，三人が会えば必ず夜の明けるまで哲学・方言について論じあったものだった。赤く充血した鋭い目をむき出して，彼は一点のごまかしもなく，あざやかに論迫してきたものだ。そのために，私はしばしば負敗をなめた。そして，スケールの大きな物の考え方や，思考の柔軟さに，いつも驚かされた。こうしたいちずで真っ直な性格が，彼のゆくてをさえぎった原因の一つになっているのかもしれない。

また，ある時は，一週間以上も学校へ出て来ず，毎日河に舟を浮かべて「生きるということは一体何だろう。」という命題を切実な問題として考え悩んでいた。しかし，決して，「わからない」と言ってサジを投げるようなことはしなかった。「何故？何故？」と自問しながら又，黙想にふけっていくようだった。またある時は，喫茶店に独り，一日中居て，方言研究の方法について考えていたとも言った。またある時には，生活費がなくなったものの，他人から借りるのは意にそわないと言って，二週間，水をのみ，塩をなめて過していた。が，たまらなくなって，大学の食堂へかけこんで行ったこともあった。

彼については，その他多くのエピソードが残っている。が，彼の死を予測できた人は少なかったのではなかろうか。「死にたい，僕は死ぬより他に道がない。」というようなことを横山君に語り，暗に，私にもほのめかしたが，我々は，それに対して何もしてやれなかったのである。いや，してやらなかったのかもしれない。だが，すでに早く，彼は，彼以外の誰にも知り得ない問題を背負ったまま，南島へ，永遠に旅立っていってしまっていたのである。

彼の死によって，広大言語学研究室関係の人々と，広大方言研究会関係の人々が少しく彼を惜しみ，悲しんだ。将来，方言研究を飛躍的に発展させる人物，するどい洞察力と柔軟さは期待できる，と彼を知る多くの者が語っていたが，それも，かなえられないこととなった。人は生れた以上必ず死ぬのである。その意味では，死ぬことを恐れるべきではないとしても，将来を嘱望され，期待されていただけに惜しまれてならないのである。それ以上に，私は，無二の親友をなくした悲しみと，私の罰によって，彼を死に追いやったのだという罪悪感に迫られて，今もなお，安らぐことができないでいる。

しかし，彼は，きっと，安らかに死んでいったにちがいない。と，せめて私はそう思い，自らを慰めているのである。

△　　△　　△

次に，日記を除いて，恐らく彼が残した最後の記録であろうと思われるものを掲げてみようと思う。そして，永眠する三ケ月前，彼はいかに考え，いかに悩み，且つ苦しんでいたかを知っていただき，彼の苦しみ越え得なかった問題を，個々人の問題意識の中へ生かしていただきたい。下に揚げるものは，広島大学生活語研究会　才一号，昭和四十年十一月二十日発行に載ったものである。

「夢　想　断　片」

文学部四年　　川内且昭

1. マントとカッシーラーの神話的→実証的。レヴィブリュール。しかし，彼は晩年にこの思想を否定した。→思想が本人から独立していってしまうこと。
2. 次元観　三次元を一つのまとまりと見て，四次元を対立させる。さらに，これらを一つのまとまりと見て，もう一つの次元を対立させる。
3. ラボアジェのこと。ゲイリュサックのこと。⬡を発見したx氏の事。
4. 神怪，鮫人，とかいって，カントのことへ，またカエサルのこと，さらに，泉井氏と，シュヴァイツァーとをむすんでおいて，一つの見方として，マルクスに触れないという事。

5. アリストテレスは，形而上学という言葉を，使ってはいないこと。

6. ギリシャの神話の事。日本の神話の事。同系統のはなしは，いたるところにあるという事。炭焼太郎のこと。蛇の事。荒らあらしさの事。四つめの犬のこと。葬式方法の事，風葬，鳥葬，土葬，火葬，境界線の事。自由な行ききの事。ことばのまとめ方，拡げ方の事。そういう性質の事。

7 大脳と間脳の事，小脳の事。電算機の事。素材がなければ，思考活動がはじまらない事。

8. 人間は死なない，という事。個人が死ぬ，という事に焦点をあわせて，恐れをよびおこすという事。他人と一体になろうとする心がけだという事。精子と卵子との合一なくして，子供が生まれる事はないという事。母親の体内から出た日を，誕生日としているという慣習の普遍性と例外。

9. サルトルが，コミュニズムへ近づくという事。デカルトの言，もちろん……印刷不明……の事ではない。論理の事，自明の事。ユークレィデスの意図，アリストテレス——（カント）→ヘーゲル。

10. Y氏の，階級上昇と，教育の事。

以上が，彼がこの世に残した最後の原稿である。すべてが痛く胸を打つ。彼が私に与えた影響は，はかり知れないものである。彼の精神の多くを生かしてゆくことが，せめても．故川内君の霊に対する報いであるかもしれないと思っている。故，川内且昭君の霊の，安らかならんことを祈りながら，筆を置く。

川　内　君　を　想　う

関　谷　孝　英

僕は，川内君の死に，責任を感じなければならないと思う。僕に“優しい，思いやりの心”があったなら，川内君は，死なずにすんだかもしれない。

十月十三日，昼まえ，長崎市花園町で，小型トラックの運転手K（２７）が，車をバックさせたとたん，車の後ろに，しゃがんで泣いていた右田久美子ちゃん（四つ）をひき殺した。朝日新聞十四日付，社会面（西部本社）には，「それにしても，残念なのは，事故直前，トラックの後ろに，幼いきょうだいが，しゃがみ込むのを，見ていた人が，何人かいた事実である。このうち，